

国語（基礎学力）

（注意事項）

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから7ページまであります。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのには法律で禁じられています。

（解答上の注意）

解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、

10

と表示のある問いに対して

④と解答する時は、下記の（例）のように解答番号10の解答欄の④にマークしてください。

（例）

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ● ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

問題は、次のページからです。

問1 次の(1)～(5)の傍線部の漢字表記として最も適当なものを、それぞれの語群①～⑤の中から一つずつ選べ。

解答番号は 1 ～ 5

(1) 委員会をシヨウシユウする。

- ① 紹集 ② 召集 ③ 招集 ④ 証集 ⑤ 唱集

(2) イギを申し立てる。

- ① 威儀 ② 意義 ③ 異義 ④ 意識 ⑤ 異議

(3) カンシヨウ用の魚。

- ① 感賞 ② 観賞 ③ 歆賞 ④ 冠賞 ⑤ 鑑賞

(4) ケントウはずれの考え方。

- ① 建闘 ② 健闘 ③ 見当 ④ 見討 ⑤ 検討

(5) ホシヨウ書をなくしてしまった。

- ① 保償 ② 補償 ③ 保障 ④ 保証 ⑤ 補証

問2 次の(6)～(10)のカタカナ語の意味として最も適当なものを、後の語群①～⑩の中から一つずつ選べ。

解答番号は 6 ～ 10

(6) ランダム (7) フレキシブル (8) ダイバーシティ (9) コンセンサス (10) ペンディング

語群

- ① 保留 ② 合意 ③ 塗り分け ④ 大都会 ⑤ 無作為
⑥ 時間差 ⑦ 柔軟な ⑧ 接続 ⑨ 正確な ⑩ 多様性

問3 次の [11] ～ [15] に入れるのに最も適当な語を、後の語群①～⑩の中から一つずつ選べ。

解答番号は [11] ～ [15]

- (11) スマホ市場が伸び悩み、生産が [11] 打ちになる。
- (12) つべこべ言わずに、 [12] に汗して働け。
- (13) もう知っているのか。君は [13] が早いな。
- (14) 初対面の人に [14] で使われて、実に不愉快だった。
- (15) 久しぶりの試合を前にして、 [15] が鳴るよ。

語群 ① 目 ② 顔 ③ 耳 ④ 顎 ⑤ 頭 ⑥ 足 ⑦ 腕 ⑧ 額 ⑨ 髪 ⑩ 眉

問4 次の (16) ～ (25) の敬語を尊敬語と謙讓語に分類し、尊敬語には①、謙讓語には②をマークせよ。

解答番号は [16] ～ [25]

- (16) いらつしやる (17) まいる (18) うかがう (19) おつしやる (20) もうしあげる
- (21) いただく (22) さしあげる (23) なさる (24) もうす (25) めしあがる

問5 次の (26) ～ (30) の「○」の中には、それぞれ同じ漢字が入る。その漢字を後の語群①～⑩の中から一つずつ選べ。

解答番号は [26] ～ [30]

- (26) ○画 ○賛 (27) ○喜 ○憂 (28) ○知 ○能 (29) ○眠 ○休 (30) ○材 ○所

語群 ① 不 ② 的 ③ 自 ④ 有 ⑤ 適 ⑥ 無 ⑦ 多 ⑧ 他 ⑨ 全 ⑩ 一

問6 次の(31)～(35)は日本の文学作品の冒頭文である。それぞれの作者を後の語群①～⑩の中から一つずつ選べ。

解答番号は

31

35

(31) 山の手線の電車に跳ね飛ばされて怪我をした、その後養生に、一人で但馬たじまの城崎温泉へ出掛けた。

(32) 木曾路はすべて山の中である。あるところは岨そはづたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた。

(33) 山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹ささせば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

(34) 朝、食堂でスープを一さじ、すつと吸ってお母さまが、「あ」と幽かすかな叫び声をお挙げになった。「髪の毛？」スープに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

(35) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落とした。

語群

① 夏目漱石

② 太宰治

③ 樋口一葉

④ 谷崎潤一郎

⑤ 川端康成

⑥ 島崎藤村

⑦ 三島由紀夫

⑧ 森鷗外

⑨ 芥川龍之介

⑩ 志賀直哉

問7 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

つい、先ごろのことだが……。

台所で茶のみばなしをしているとき、私の老母が、

「私が夢中ではたらいっているころ、十日に一度は御徒町おからまちの金鯔きんずしへ行かなきゃ、腹の虫がおさまらなかつた」

などと、いい出した。

よくよく聞いてみると、それは、子どもの私と弟と祖母・曾祖母そうそぼを女手ひとつに抱えて、三十をこえたばかりの母がはたらいっていたころのことになるらしい。

当時、私どもの家は、下谷御徒町からも程近い浅草永住町にあったのだが、私も舎弟も、御徒町の金鯨なる店へ連れて行ってもらったおぼえは、「一度もない」のである。

それなのに母は、十日に一度、かならず金鯨へ立ち寄り、ひとりで鯨をつまんでいたという。

「知らなかったな。おれは一度も、つれて行ってもらったことがない」

「そりや当たり前だ。つれて行かなかったんだもの」

私と弟のみか、祖母も曾祖母も、むろん、つれて行ったことはないと言明をした。

「言語道断だ。とんでもない子不孝だ」

と、私はいったが、むろん、冗談にである。

もつとも、当時の私と弟が、この母の秘密を知ったら、おそらく憤慨したにちがいない。

いうまでもなく、私どもをつれて行きたいのは、母も山々のことであつたらう。しかし、それは母の経済がゆるさぬ。

我が家も貧乏の最中であつて、私が旧制小学校を終え、すぐに兜町の株式仲買店へはたらきに出たとき、店へ挨拶に来た母が、女持ちの雨傘が買えず、はたらいしている先の大きな番傘をさしてあらわれたのを、いまでもおぼえている。この一事をおもつても、母が女持ちの傘を買うより、むしろ鯨をつまむことへ、乏しい財布の口をひらいたことがわかるうというものだ。

そうした中で、十日に一度はひとりきりで、好物の鯨をつまむ。こりや怪しからぬ。それだけの余裕があつたら、自分の子や母・祖母にも何かしてやったらいいではないか。それでこそ女だ。それでこそ人の親ではないか……と、おもわれるむきもあるうが、うちの母の考え方は、すこし、ちがうのだ。

初婚、再婚に破れ、二人の子と共に実家へ帰り、血眼になつて家族を養っている。

いまおもうと、女ながら殺氣立っていたのは当然であつて、それはまあ、大変なことだつたらう。

だが、何のたのしみもなしに、長い年月をはたらいているだけでは、油が切れてしまう。

十日に一度、おもいきつて、ひとりきりで好物の鯨をつまむ。それで、はたらく甲斐も出て来る。また十日たつと、金鯨へ来て、好物の赤貝のヒモやらマグロの鯨などを腹中へ入れることができる。

「ああ、おいしい……」

と、食べ終わって、大きな茶わんになみなみとくみこまれた香ばしい茶をすすりながら、おそらく母は、まるで、気楽な女の独り暮らしをしてで

もいるかのような充実感をおぼえたことであろう。

そこへ、子どもの私と舎弟がくつついていたのでは、まったく打ちこわしてしまう。逃げ切れぬ現実の世界によびもどされて、鮪の味までちがってきたらう。

まず、このように、十日に一度、好物の鮪をつまむことだけでも、人間というものは苦しみを乗り切って行けるものなのだ。つきつめて行くと、人間の「幸福」とは、このようなものでしかないのである。

「それでは、あまりにも低俗すぎる」

といわれても、私は、そうおもわざるを得ない。頭脳の栄養も多くとるにこしたことはないが、肉体の栄養が人間にとって、もっとも大事だ。この場合の栄養という意味は、贅沢な食ぜいたくべ物や料理のことではない。肉体そのものの機能をいうのである。

たとえ一本の大根、一個の芋。一尾の干魚にしても、これを口中こうちゆうに入れるときの愉楽が、頭脳へまで波紋のごとくひろがってゆくイメージーションを、人間の肉体はそなえていなくてはならぬ。

そのことを、いうのである。

(池波正太郎『江戸前食物誌』による)

【問い】本文の内容に合致するものに①、合致しないものに②をマークせよ。

解答番号は

36

50

- (36) 三十代のころの母は、多忙のあまり、毎日が空腹の状態であった。
- (37) 母は、自分がかつて一人で鮪屋に通っていたことを、今では申し訳なかったと思っている。
- (38) 母が一人で鮪屋に通っていたことを知らされた「私」は、一瞬、大変な怒りを感じた。
- (39) 母は、子どもを鮪屋に連れて行きたいと、常に思っていた。
- (40) 母は、なけなしの金を使って女性用の傘を買うことより、その金で鮪をつまむことを選んだようだ。
- (41) 母は、子どもや祖母、曾祖母には金を使わず、自分のためだけに金を使っていた。
- (42) 今、「私」は母の金の使い方が非常識であったと感じている。

- (43) 母は、尋常でない忙しきから生じる自らの殺気を打ち消すために、鮭を食べていた。
- (44) 母にとって、十日に一度食べる鮭は、彼女の多忙な生活を支える力の源となっていた。
- (45) 母は、ひとりで鮭を食べながら、女の独り暮らしに戻ることを夢見ていたようだ。
- (46) ひとりで鮭を食べている時の母は、つかの間の、夢のような至福の時を過ごしていたであろう、と「私」は考えている。
- (47) 十日に一度、鮭をつまめば、人間は誰でも苦しみを乗り越えていくことができる。
- (48) たまにおいしいものを食べるような、ほんのちよつとしたことの中に、人間の「幸福」は存在している。
- (49) 人間は、たまに贅沢な食べ物や料理を口にして、肉体に栄養を取り込むことが重要である。
- (50) 人間の肉体は、食べ物を楽しむことによって生じる喜びを、全身で感じられる機能を備えていなければならない。

問8 次の①～⑥の段落を筋が通るように並べ替え、3番目と5番目に位置する段落の番号を答えよ。

解答番号は3番目 、5番目

- ① これらの回答が示すように、私たちは曖昧な私たちではあるにせよ、「勉強」と「学び」を意識的に分ける思考を開始しています。「勉強」の文法から決別して「学びとは何か」を問うことによって、私たちは「勉強」から「学び」への転換の一步を踏み出すことができます。
- ② この定義は、旧字体の「學」という字の成り立ちにも通じています。「學」という字の上部の中心の「メ」と「メ」は、それぞれ「交わり」を意味しています。上部の「メ」は、祖先の霊との交わり、すなわち学問や芸術や文化との交わりを意味しています。それに対して下部の「メ」は、仲間同士の交わりを意味しています。交わりのないところに学びは成立しないのです。「學」の字の上部の両脇の「尸」と「凵」は、子どもの交わりをケアし導いている大人の両手を意味しています。子どもの交わりに心を砕く教師（大人）のいないところに学びは成立しないのです。そして、「學」という字は、建物を意味する冠の下を中心に「子」を配して構成されています。まるで二十世紀の学校のあり方をそのまま表現したような字体です。現在の「学」の字体の上部「讠」は、大人も子どもも勝手な方向を向いて交わっていません。そこに学びが成立しない最大の問題があると書いてもいいでしょう。

③ ある受講生の市民の方は、「勉強は絶えず終わりを告げるもの」「学びは絶えず始まりを準備するもの」と記していました。「お見事」とうなら

された回答です。また、別のある受講生の市民の方は「勉強は前へ前へと進むもの」「学びは行きつ戻りつするもの」と記していました。これも「なるほど」と納得させられた回答です。

④ 「勉強」と「学び」の違いはどこにあるのでしょうか。そう問うと、多くの人が「勉強は強制してやらされるもの」「学びは自主的に取り組むもの」と答えます。しかし、この答えの区別は、あまりにも単純で皮相的な見方と言わざるをえません。かつて日本の子どもは「勉強」を「自主的に遂行しましたし、「学び」の中には「強制」されても価値あるものがたくさんあります。以前、ある市民大学の講座で「勉強と学びの違いは？」と自由に書いてもらったことがあります。その答えの中には、いろいろ参考になるものがたくさんありました。

⑤ 「学び」とは、モノ（対象世界）との出会いと対話による「世界づくり」と、他者との出会いと対話による「仲間づくり」と、自分自身との出会いと対話による「自分づくり」とが三位一体となって遂行される「意味と関係の編み直し」の永続的な過程であると、私は定義しています。

⑥ 私自身は、「勉強」と「学び」との違いは、「出会いと対話」の有無にあると考えています。「勉強」が何ものとも出会わず何ものとも対話しないで遂行されるのに対して、「学び」はモノや人や事柄と出会い対話する営みであり、他者の思考や感情と出会い対話する営みであり、自分自身と出会い対話する営みであると思います。

(佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』による)